

「よい 地獄さん行くとぞ！」

二人はデッキの手すりに寄りかかって、蝸牛^{かたつむり}が背のびしたごと延びて、海ば抱え込うだ函館の街ば見とった。漁夫は指元まで吸いつくした煙草ば唾と一緒に吐き出ゃ一た。巻煙草はおどけたごと、色々にひっくりかえって、高か船腹^{サイド}すれすれに落ちて行た。彼は身体中酒臭かった。

赤か太鼓腹ばただ広う浮かばせとる汽船や、積荷の最中らしく海の中から片袖ばグイと引張られてでもいるかのごて、思いっ切り片側^{そば}に傾いととてろん、黄色か太か煙突、大か鈴んごたるグイ、南京虫んごて船と船の間ばせわしゅう縫ととるランチ、寒々とざわめいとる油てろんパン屑てろん腐った果物が浮いとる何か特別な織物のごたる波…。風ん具合で煙が波とすれすれになびいて、ムツとする石炭の匂いば送った。ウインチのガラガラという音が、時々波を伝うて直接^{じか}に響いてきた。

こん蟹工船博光丸ンすぐ手前に、ペンキの剥げた帆船が、へさきの牛の鼻ンすのごたるところから、錨の鎖ば下した甲板を、マドロス・パイプばくわえた外人が二人同じところば何度も機械人形んごて、行たり来たりしとととが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視じゃった。

「俺っだもう一文も無か。糞。こりゃ」

そう云うて、身体ばずらせて寄こした。そしてもう一人の漁夫ん手ば握って、自分の腰んところに持っていった。裨天^{はんてん}の下んコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小^{こま}んか箱らしかった。

一人は黙って、そん漁夫ん顔ばみた。

「ヒヒヒヒ……」ちゅて笑うて、「花札たい」ちいうた。

ボート・デッキで、「将軍」のごたる恰好^{かっこう}ばした船長が、ブラブラしながら煙草ばのんどる。はき出^うす煙が鼻先からじき急角度に折れて、ちぎれ飛うだ。底に木ば打った草履ばひきずって、食物バケツばさげた船員が急がしゅう「おもて」の船室ば出入した。用意はちゅんと出来て、もう出^うるばかりになっていた。

雑夫のいるハッチを上から覗きこめば、薄暗か船底の棚に、巢から顔だけピョコピョコ出す鳥のごて、騒ぎ廻とととが見えた。皆十四、五の少年ばかりじゃった。

「お前や何処きゃ」「××町」みんな同じじゃった。函館の貧民窟^{くつ}ん子供ばかりじゃった。そういうとは、それだけでひとかたまりになっとった。

「あっちん棚は？」 「南部」 「そりゃー？」 「秋田」 それ等は各々棚ばちがえとった。

「秋田ん何処きゃー」 膿^{うみ}んごたる鼻ばたらした、眼のふちがあかべしたごてただれとととが、

「北秋田ばな」ち云うた。 「百姓きゃー？」 「そがん」

空気がムンムンして、何か果物じゃい腐ったすっぱか臭気がしとった。漬物ば何十樽もたくわえてある室が、じき隣りじゃったけん、「糞」んごたる臭いも交とった。

「こんだ親父抱いて寝てやっぞ」 漁夫がべらべら笑うた。

薄暗か隅ん方で、裨天^{はんてん}ば着、股引^{また}ばはいた、風呂敷ば三角にかぶった母親が、林檎ん皮ばむいて、棚に腹這いになとるとる子供に食わせてやとった。子供ん食うとば見ながら、自分で剥いたぐるぐるの輪になった皮ば食うとる。何かしゃべったり、子供のそばん小^{こま}か風呂敷包みば何度も解いたり、直してやとった。そういうのが七、八人もおった。誰も送って来てくれるもんはおらん内地^{くに}から来た子供達は、時々そっちん方ばぬすみ見るごて、見とった。

髪や身体がセメントの粉まみれになとるとる女が、キャラメル^{ふと}の箱から二粒位ずつ、その附近の子供達に分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやってくれぞ、な」ちいうとった。木の根のごて不格好に大かザラザラした手じゃった。

子供に鼻ばかんでやとるとるもんや、手拭^{てんげ}で顔ばふいてやっているもんや、ボソボソ何か云うとるもんがおった。

「お前さんとこんの子供は、身体はよかもねな」 母親同志じゃった。 「ん、まあ」「俺げんたア、ともこも弱かつじゃん。どがんしゅうかいと思うとばって、何んしろ……」「それア何処でん、なあ」

二人の漁夫がハッチから甲板に顔を出せば、ホツとした。不機嫌に、急にだまり合うたまま雑夫の穴より、もっと船首の、梯形^{ていけい}の自分達ん「巢」に戻った。錨ば上げたり、下したりする度に、コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたごて、皆は跳ね上り、ぶっつかり合わんばならんじゃった。

薄暗か中で、漁夫は豚んごてゴロゴロしとった、それに豚小屋^{こま}そっくりの、胸がすぐゲ

エと来そうな臭いがしとった。

「臭か、臭か」 「そがん、俺どんじゃもね。いい加減、こりゃ腐りかけた臭いもするさい」

赤か臼んごたる頭ばした漁夫が、一升瓶そんなまで、端んかけた茶碗に酒ば注いで、鯛ばムシャムシャやんながら飲んどった。そんな横に仰向けにひっくり返って、林檎ば食いながら、表紙のボロボロした講談雑誌ば見とるのがおった。

四人輪になって飲うどったとに、まだ飲み足らんじゃった一人が割り込むで行った。

「……そがんたい。四カ月も海の上じゃもね。もう、こんなとやらんばち思うて……」
頑丈な身体ばしたのが、そがん云うて、厚か下唇ば時々癖んごて嘗めながら眼ば細めた。
「そっで、財布、こっじゃっきゃ」

干柿んごたるべったりした薄か臺口ば眼の高さに振ってみせた。

「あの白首、身体ちゆえば小かくせに、ともこも上手じゃったぞ！」

「おい、止せ、止せ！」 「よか、よか、やれやれ」 相手はへへへへちゆて笑うた。

「見ろ、ほりゃ、感心なもんだ。ん？」 酔うた眼ば丁度向い側の棚ん下にすえて、顎で、
「ん！」 ちゆて一人が云うた。

漁夫がそんな女房に金ば渡しとるところじゃった。 「見ろ、見ろ、なア！」

小か箱ん上に、皺くちゃになった銀貨ば並べて、二人でそりば数えとった。男は小か手

帖に鉛筆ば舐めなめ何か書とる。 「見ろ。ん！」

「俺っちゃ、かかあや子供はおっとじゃけん」 白首のことば話した漁夫が急にはるきゃーて云うた。

そこから少し離れた棚に、宿酔いの青ぶくれにムクンだ顔ばした、頭ん前だけば長くした若っか漁夫が、

「俺アもう今度こそ、来うみゃて思うとったっばってな」と大声で云うとった。「周旋屋に引っ張り廻されて、文無しになってさい。 又、長ごうまでくたばるめに合わさるっとさい」

こっちに背ば見せとる同じ処から来とるらしか男が、それに何かヒソヒソ云うていた。

ハッチの降口に始め鎌足ば見せて、ゴロゴロする大か昔風ん信玄袋ば担った男が、梯子ば下りてきた。床に立ってキョロキョロ見廻わしとったが、空いとつとば見付くつと、棚

に上って来た。

「今日わ」ち云うて、横の男に頭ば下げた。顔が何かで染ったごて、油じみて、黒かった。

「仲間に入れとります」

後で分ったことばって、こん男は、船へ来るすぐ前まで夕張炭坑に七年も坑夫ばしていた。それがこの前んガス爆発で、危く死に損ねてから 前に何度かあった事ばって フイと坑夫が恐ろしゅうなり、鉋山ば下りてしもた。爆発んとき、彼は同じ坑内にトロッコば押して働いとった。トロッコに一杯石炭ば積んで、他の人ん受持場まで押して行た時じゃった。彼は百のマグネシウムば瞬間眼の前でたかれたと思うた。

それと、1/500 秒もちがわず、自分の身体が紙ッ切れんごて何処かに飛び上ったて思うた。何台というトロッコがガスの圧力で、眼の前ば空のマッチ箱よりも軽うフッ飛んで行た。それッ切り分らんじゃった。どの位経ったか、自分の唸った声で眼が開いた。監督や工夫が爆発が他に及ばんごて、坑道に壁ば作っていた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出来る炭坑夫の、一度聞いたら心に縫い込まれでもするごて、決して忘るることの出来ん、救いば求める声ば「ハッキリ」聞いた。彼は急に立ち上ると、気が狂うたごて、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこうで、叫びじゃーた。(彼は前の時は、自分でその壁ば作ったことがあった。そのときは何んでもなかったばってか)

「馬鹿野郎！ こけー火でも移ってみろ、大損だ」

だが、だんだん声ん低うなっていくとが分るじゃなかや！ 彼は何ば思ったのか、手ば振ったり、わめいたりして、無茶苦茶に坑道ば走り出した。何度ものめったり、坑木に額ば打ちつけた。全身ドロと血まみれになった。途中、トロッコの枕木につまずいて、巴投げにでもされたごて、レールん上にたたきつけられて、又氣ば失うてしもうた。

そん事は聞いとった若っか漁夫は、

「さあ、ここっちゃ そう大して変らんばって……」ち云うた。

彼は坑夫独特な、まばいかごたる、黄色ッぽか艶んなか眼差しば漁夫の上にと置いて、黙とった。

秋田、青森、岩手から来た「百姓の漁夫」のうちじゃ、大うあぐらかいて、両手ばはずがいに股に差しこうでムシツとしとるのや、膝ば抱えこうで柱によりかかりながら、無心に皆が酒ば飲うでいるのや、勝手にしゃべり合うとるのに聞き入とるとるのがおる。 朝暗

いうちから畑に出て、それで食えでにゃ、追払われてくる者達じゃった。長男一人ば残して、それでもまだ食えんじゃった。女は工場の女工に、次男も三男も何処かへ出て働かんばなん。鍋で豆ば選^えるごて、余った人間はドシドシ土地からハネ飛ばされて、市に流れて

出てきた。彼等はみんな「金ば残して」内地^{くに}に帰ることば考えとる。しかし働いてきて、一度陸ば踏む、するとモチば踏みつけた小鳥んごて、函館や小樽でバタバタやる。そうすれば、まるッきり簡単に「生れた時」とちっとも変らん赤裸になって、おっぼり出された。

内地^{くに}に帰れんごてなる。彼等は、身寄りのなか雪の北海道で越年するために、自分の身体ば手鼻位の値で「売らなければならん」。彼等はそりば何度繰りかえしたっちゃ、出来の悪か子供んごて、次の年には又平気で(?)同じことばやってのけた。

菓子折ば背負った沖売の女や、薬屋、それに日用品ば持った商人が入ってきた。真中の離島のごて区切られている所に、それぞれの品物ば広げた。皆は四方の棚の上下の寝床から身体ば乗り出して、ひやかしたり、冗談ば云うた。

「お菓子めえか、ええ、ねっちゃよ？」

「あッ、もっちゃこい！」沖売の女が頓狂な声を出して、ハネ上った。「人の尻に手ばやったりして、いけすかん、こん男！」

菓子で口をモグモグさせていた男が、皆の視線が自分に集ったことにテして、グラグラ笑うた。

「この女子、可愛かね」

便所から、片側^{そば}の壁に片手をつきながら、危か足取りで帰ってきた酔払いが、通りすがりに、赤黒くプクンとしている女の頬^{ほっ}ぺたをつつついた。

「何んね」「怒んなよ。この女子ば抱いて寝てやるべよ」

そう云うて、女におどけた恰好^{かっこう}ばした。皆が笑うた。

「おい饅頭、饅頭！」ずウと隅ん方から誰か大声でおめーた。

「ハイイ……」こんな処ではめずらしい女のゆう通る澄んだ声で返事した。「幾らですか？」

「幾ら？ 二つもあたら不具じゃろもん。お饅頭、お饅頭！」急にワッと笑い声が出た。「この前、竹田って男が、あん沖売の女ば無理矢理に誰もおらん所に引っ張り

込^いうで行たच्चゅた。だけん、面白かつじゃか。どがしこ、どがんしても駄目じゃたち云

うた……」酔うた若い男じゃった。「……猿股^{また}着とったच्चゅた。竹田がいきなりそりばカ一杯にはぎ取ってしまうたばって、まだ下に着とるゆうじゃか。三枚も着とったच्च

ゅた……」男が頸^{くび}を縮めて笑い出やーた。

その男は冬ん間はゴム靴会社の職工だった。春になり仕事が無くなれば、カムサツカに出稼ぎに出た。どっちん仕事も「季節労働」じゃけん、(北海道ん仕事は殆んどそれじゃった)イザ夜業となると、ブツ続けに続けた。「もう三年も生きられたら有難か」ち云うとった。粗製ゴムのごたる、死んだ色ん膚ばしとった。

漁夫の仲間には、北海道の奥地の開墾地や、鉄道敷設の土工部屋に「蛸」に売られたことのある者や、各地を食いつめた「渡り者」や、酒だけ飲めば何もかもなく、ただそれでいい者などがおった。青森辺の善良な村長さんに選ばれてきた「何も知らん」「木の根っこんごて」正直な百姓もそん中に交っとる。そして、こういうてんでんばらばらのもの等は集めることが、雇うものにとって、この上なく都合んよかことじゃった。(函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっとった。青森、秋田の組合などとも連絡ばとって。それば何より恐れとった)

糊んついた真白か、上衣ん丈ん短か服ば着た給仕が、^{ボーイ}「とも」のサロンに、ビール、果物、洋酒のコップを持って、忙しく行き来しとった。サロンには、「会社のオツかなか人、船長、監督、それにカムサツカで警備の任に当る駆逐艦御大、^{おんたい}水上警察の署長さん、海員組合折鞆^{おりかぼん}」がいた。

「畜生、ガブガブ飲むったら、ありゃしない」^{ボーイ}給仕はふくれかえとった。

漁夫の「穴」に、浜なすのごたる電気がついた。煙草の煙や人息で、空気が濁って、臭く、穴全体がそのまま^{くそつぼ}「糞壺」じゃった。区切られた寢床にゴロゴロしとる人間が、^{うじむし}蛆虫んごてうごめいて見えた。漁業監督を先頭に、船長、工場代表、雑夫長がハッチば下って入って来た。船長は先のハネ上とる髭ば気にして、始終ハンカチで上唇ば撫でつけた。通路には、林檎やバナナン皮、グジョグジョした^{たかじょう}高上、草鞋、飯粒のこびりついている薄皮などがう捨ててあつた。流れの止った^{どぶ}泥溝じゃった。監督はじろりそりば見ながら、無遠慮に唾ばはいた。どれも飲んで来たらしく、顔ば赤うしとった。

「一寸云うて置く」監督が土方の^{ぼうがしら}棒頭んごて頑丈な身体で、片足ば寢床ん仕切りん上にかけて、^{ようじ}楊子で口ばモグモグさせながら、時々歯にはさまったもんば、トットツ飛びゃーて、口ば切った。

「分とるもんもあろうばって、云うまでもなくこん蟹工船の事業は、ただ単にだ、一会社の儲け仕事と見るべきじゃなくて、国際上の一大問題なんじゃ。我々が我々日本帝国人民が偉かか、露助が偉かか。一騎打ちの戦いなんじゃ。それにもし、若しもだ。そがん事は絶対にあるべき筈はなかが、負くるようなことがあれば、^{きんたま}鞞丸ばブラ下げた日本男児

は腹でも切って、カムサツカの海の中にブチ落つることだ。身体がこま小かったっちゃ、野呂間な露助に負けてたまるもんか。

「それに、我カムサツカの漁業は蟹罐詰ばかりじゃなく、鮭鱒と共に、国際的に云うてだ、他の国とは比らべもんにもならん優秀な地位ば保っており、又日本国内の行き詰った人口問題、食糧問題に対して、重大な使命ば持ってとるんだ。こがん事はしゃべったっちゃ、お前等には分りもせんじゃろうが、ともかくだ、日本帝国の大きな使命のために、俺達は命ば的に、北海の荒波をつっ切って行くんだということば知っとって貰わにゃならん。だからこそ、あっちへ行っても始終、我帝国の軍艦が我々ば守っていてくれることになっとるんだ。……そりば今流行の露助の真似はやりばして、飛んでもなかことばケシかけるもんがあるとしたら、それこそ、取りも直さず日本帝国を売るものだ。こがん事は無い筈だが、よく覚えておいて貰うことにする……」

監督は酔いざめのくさめを何度もした。

酔払った駆逐艦の御大おんたいはバネ仕掛の人形のごたるギクシャクした足取りで、待たしてあるランチに乗るために、タラップいば下りて行た。水兵が上と下から、カントン袋に入れた石ころんごたる艦長を抱えて、殆んど持てあましてしもうた。手ば振ったり、足をふんばったり、勝手なことをわめく艦長のために、水兵は何度も真正面から自分の顔に「唾」を吹きかけられた。

「表じゃ、何んとか、かんとか偉いこと云うてこの態さまだ」

艦長をのせてしもうて、一人がタラップのおどり場からロープば外しながら、ちらっと艦長の方ば見て、低い声で云うた。

「やっちまおうか!?!……」

二人は一寸息をのんだ、が……声を合せて笑い出や一た。

二

祝津の燈台が、廻転する度にキラッキラッと光ったが、ずうと遠い右手に、一面灰色の海のごたる海霧ガスの中から見えた。それが他方へ廻転してゆくとき、何か神秘的に、長く、遠く白銀色の光芒こうぼうを何海里もサッと引いた。

留萌^{るもい}の沖あたりから、細か、ジュークジュークした雨が降り出してきた。漁夫や雑夫は蟹^{はさみ}の銚のごてこじけた手ば時々はすがいに懐の中につっこんだり、口のあたりを両手で円く囲んで、ハアーと息ばかけたりして働かんばならなかった。納豆の糸んごたる雨がひっきりなしに、それと同じ色の不透明な海に降った。が、稚内^{わっかない}に近くなるに従って、雨が粒々になって来、広い海の面が旗でもなびくごて、うねりが出て来て、そして又それが細かく、せわしゅうなった。風がマストに当たると不吉に鳴った。鉦^{びょう}がゆるみでもするごて、ギイ

ギイと船の何処かが、しきりなしにきしんだ。宗谷海峡に入った時は、三千噸^{トン}に近いこの船が、しゃっくりにでも取りつかれたごて、ギク、シャクし出した。何か素晴しか力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮かぶ。が、ぐうと元の位置に沈む。エレヴェターで下りる瞬間の、小便がもれそうになる、くすぐったか不快さをその度を感じた。雑夫は黄色になえて、船酔らしく眼だけとんがらせて、ゲエ、ゲエしとった。

波のしぶきで曇った円い舷窓^{げんそう}から、ひょいひょいと樺太^{からふと}の、雪のある山並の堅い線が見えた。しかしすぐそれはガラスの外へ、アルプスの氷山のごてモリモリとむくれ上ってくる波に隠されてしまう。寒々とした深い谷が出来る。それが見る見る近付いてくると、窓のところへドッと打ち当り、砕けて、ザアー……と泡立つ。そして、そのまま後へ、後へ、窓をすべって、パノラマのごて流れてゆく。船は時々子供がするごて、身体を揺った。棚からものが落ちる音や、ギーイと何かたわむ音や、波に横ッ腹がドブーンと打ち当る音がした。その間中、機関室からは機関の音が色々な器具を伝って、直接^{じか}に少しの震動を伴ってドッ、ドッ、ドッ……と響いとった。時々波の背に乗ると、スクリュが空廻りして、翼で水の表面をたたきつけた。

風は益々強くなってくるばかりじゃった。二本のマストは釣竿のようにたわんで、ビュウビュウ泣き出ゃーた。波は丸太棒の上でも一またぎする位の無雑作で、船の片側^{そば}から他の側^{そば}へ暴力団のごてあばれ込うできて、流れ出て行た。その瞬間、出口がザアーと滝になった。

見る見るもり上った山の、恐ろしく大^{ふと}か斜面に玩具の船程に、ちょこんと横にのっかることがあった。と、船はのめったごて、ドッ、ドッと、その谷底へ落ちこんでゆく。今にも、沈む！ が、谷底にはすぐ別な波がむくむくと起ち上^たってきて、ドシンと船の横腹と体当りする。

オホツク海へ出ると、海の色がハッキリもっと灰色がかって来た。着物の上からソクソクと寒さが刺し込んできて、雑夫は皆唇をブシ色にして仕事ばした。寒くなればなる程、塩んごて乾いた、細か雪がビュウ、ビュウ吹きつものってきた。それは硝子の細かカケラのごて甲板に這いつくばって働いてとる雑夫や漁夫の顔や手に突きささった。波が一波甲板を洗うて行った後は、すぐ凍えて、デラデラに滑った。皆はデッキからデッキへロープを張り、それに各自がおしめのごてブラ下り、作業をしなければならんじゃった。監督は鮭殺しの棍棒こんぼうをもって、大声で怒鳴り散らした。

同時に函館を出帆した他の蟹工船は、何時の間にか離れ離れになってしもとった。それでも思いっきりアルプスの絶頂に乗り上がったとき、溺死者できしが両手を振っているごて、揺られに揺られとる二本のマストだけが遠くに見えることがあった。煙草の煙ほどの煙が、波とすれすれに吹きちぎられて、飛うでいた。……波浪と叫喚のなかから、確かにその船が鳴らしているらしか汽笛が、間を置いてヒュウ、ヒュウと聞えた。が、次の瞬間、こっちがアプ、アプでもするごて、谷底に転落して行た。

蟹工船には川崎船を八隻のせていた。船員も漁夫もそれを何千匹の鱻ふかのごて、白い歯をむいてくる波にもぎ取られんごて、縛りつけるために、自分等の命を「安々」と賭けなければならんじゃった。「貴様等の一人、二人が何んだ。川崎一艘取られてみろ、たまったもんじゃかと」監督は日本語でハッキリそういった。

カムサツカの海は、よくも来やがった、と待ちかまえとったごて見えた。ガツ、ガツに飢えている獅子んごて、襲いかかってきた。船はまるで兎より、もっと弱々しかった。空一面の吹雪は、風の工合で、白い大か旗ふとがなびくごて見えた。夜近くなってきた。しかし時化は止みそもなかつた。

仕事が終わると、皆は「糞壺くそつぼ」の中へ順々に入り込うできた。手や足は大根のごて冷えて、感覚なく身体についとった。皆は蚕のごて、各々の棚の中に入ってしまうと、誰も一口も口をきく者がいなかった。ゴロリ横になって、鉄の支柱につかまった。船は、背に食いついとる蛇あぶを追払う馬のごて、身体をやけに振とる。漁夫はあてのなか視線を白ペンキが黄色すすに煤けた天井にやったり、殆ど海の中に入りッ切りになつとる青黒い円窓にやったり……中には、呆けたごてキョトンと口を半開きにしとるものもいた。誰も、何も考えていなかった。漠然とした不安な自覚が、皆を不機嫌にだまらせとった。

顔を仰向けにして、グイとウイスキーをラッパ飲みにしとる。赤黄く濁った、にぶい電燈のなかでチラッと瓶の角が光ってみえた。ガラ、ガラッと、ウイスキーの空瓶が二、三カ所に稲妻形に打ち当って、棚から通路にカー杯に投げ出された。皆は頭だけをその方に向けて、眼で瓶を追った。隅の方で誰か怒った声を出した。時化にとぎれて、それが片言のごて聞えた。

「日本を離れるんだと」円窓を肱で拭っとる。

「糞壺」のストーヴはブスブス燻ってばかりいた。鮭や鱒と間違われて、「冷蔵庫」へ投げ込まれたごて、その中で「生きている」人間はガタガタふるえていた。ズックで覆ったハッチの上をザア、ザアと波が大股に乗り越して行った。それが、その度に太鼓の内部のごたる「糞壺」の鉄壁に、物凄い反響を起した。時々漁夫の寝ているすぐ横が、グイと男の強い肩でつかれたごて、ドシンとくる。今では、船は、断末魔の鯨が、荒狂う波濤の間に身体をのたうっとる、そのままじゃった。

「飯だ！」賄いがドアーから身体の上半分をつき出やて、口で両手を囲んで叫んだ。「時化とるけん汁なし」

「何んて？」

「腐れ塩引！」顔をひっこめた。

思い、思い身体を起した。飯を食うことには、皆は囚人のごたる執念さを持っていた。ガツガツだった。

塩引の皿を安坐ばかいた股の間に置いて、湯気をふきながら、バラバラした熱い飯を頬ばると、舌の上でせわしゅ、あちこちへやった。「初めて」熱いものを鼻先にもってきたために、水漬がしきりなしに下がって、ひょいと飯の中に落ちそうになった。

飯を食っとると、監督が入ってきた。

「いけホイドして、ガツガツまくらうな。仕事もろくに出来ない日に、飯ば鱈腹食われてたまるもんか」

ジロジロ棚の上下を見ながら、左肩だけを前の方へ揺って出て行った。

「一体あいつにあがんこと云う権利があっとか」船酔と過労で、ゲッソリやせた学生上りが、ブツブツ云った。「浅川ッたら蟹工の浅か、浅の蟹工かってな」

「天皇陛下は雲の上にいるから、俺達にゃどうでもよかばって、浅ってなれば、どっこい
そうは行かんけんな」 別な方から、

「ケチケチすんなえ、何んだ、飯の一杯、二杯！ なぐってしまえ！」唇を尖んがらした
声じゃった。

「偉い偉い。そいつを浅の前で云えれば、なお偉い！」

皆は仕方なく、腹を立てたまま、笑ってしもた。

夜、余程過ぎてから、雨合羽を着た監督が、漁夫の寝ているところへ入ってきた。船の
動揺を棚の枠につかまって支えながら、一々漁夫の間にカンテラを差しつけて歩いた。南瓜
のごてゴロゴロしとる頭を、無遠慮にグイグイと向き直して、カンテラで照らしてみている。フンづけられたって、目を覚ます筈がなかった。全部照し終ると、一寸立ち止まって
舌打ちをした。 どうしようか、そんな風だった。が、すぐ次の 賄 部屋の方へ歩き出し
た。末広な、青ッぽいカンテラの光が揺れる度に、ゴミゴミした棚の一部や、脛の長い防
水ゴム靴や、支柱に懸けてあるドザや袷天、それに行きなど的一部分がチラ、チラッと光
って、消えた。 足元に光が震えながら一瞬間溜まる、と今度は賄のドアに幻燈のごた
る円るか光の輪を写した。 次の朝になって、雑夫の一人が行衛不明になったことが知れ
た。

皆は前の日の「無茶な仕事」を思い、「あれじゃ、波に浚われたんだ」と思った。イヤな
気持がした。然し漁夫達が未明から追い廻わされたので、そのことではお互に話すことが
出来なかった。

「こがんだか水に、誰が好き好んで飛び込むか！ 隠れてやがるんだ。見付けたら、畜
生、タタきのめしてくるる！」

監督は棍棒を玩具のごてグルグル廻しながら、船の中を探して歩いた。

時化は頂上を過ぎちゃいた。それでも、船が行先きにもり上った波に突き入ると、「おも
て」の甲板を、波は自分の敷居でもまたぐごて何んの雑作もなく、乗り越してきた。一昼
夜の闘争で、満身に痛手を負ったごて、船は何処か跛な音をたてて進んでいた。薄い煙の
ごたる雲が、手が届きそうな上を、マストに打ち当りながら、急角度を切って吹きとんで行
った。小寒い雨がまだ止んどらん。四囲にもりもりと波がムクレ上ってくると、海に射込

む雨足がハッキリ見えた。それは原始林の中に迷いこんで、雨に会うのより、もっと不気味じゃった。

麻のロープが鉄管でも握るごて、バリ、バリに凍えとる。学生上りが、すべる足下に気を配りながら、それにつかまって、デッキを渡ってゆくと、タラップの段々を一つ置きに片足で跳躍して上ってきた給仕^{ボーイ}に会った。

「チョット」給仕^{ボーイ}が風の当らない角に引張って行^いった。「面白いことがあつとぞ」と云って話してきかせた。

今朝の二時頃だった。ボート・デッキの上まで波が躍り上って、間を置いて、バジャバジャ、ザアッとそれが滝のように流れていた。夜の闇^{やみ}の中で、波が歯をムキ出すのが、時々青白く光ってみえた。時化^{しけ}のために皆寝ずにいた。その時だった。船長室に無電係^{あわて}が周章^{まわ}てかけ込^こうできた。「船長、大変です。S・O・Sです!」「S・O・S? 何船だ!?!」「秩父丸です。本船と並んで進んでいたんです」

「ボロ船だ、それア!」浅川が雨合羽^{また}を着たまま、隅の方の椅子に大きく股を開いて、腰かけとった。片方の靴の先だけを、小馬鹿にしたごて、カタカタ動かしながら、笑った。「もっとも、どの船だって、ボロ船じゃもね」「一刻と云えんごたる」「うん、それア大変だ」

船長は、舵機室に上るために、急いで、身仕度もせず^せにドアを開けようとした。然し、まだ開けないうちじゃった。いきなり、浅川が船長の右肩をつかんだ。「余計な寄道せろちゆて、誰が命令したっか」

誰が命令した? 「船長」ではないか。が、突^{とつ}碰^{つき}のことで、船長は棒杭^{ぼうぐい}より、もっとキョトンとした。然し、すぐ彼は自分の立場を取り戻した。

「船長としてだ」「船長としてだアア!?!」船長の前に立ち^たはだ^かった監督が、尻上りの侮辱^{おそ}した調子で抑えつけた。「おい、一体これア誰の船だんだ。会社^{チャーター}が傭船^{ちやうせん}しとっただけん、金を払^はうて。ものを云えるの^ア会社代表の須田さんとこの俺だ。お前なんぞ、船長と云^いってりや^{ふと}大きな顔しとるが、糞場の紙位^しえの価値もなかつぞ。分^わつとるか。あがんとにかかわってみろ、一週間もフイにな^なつぞ。冗談^{じや}じゃなか。一日でも遅^{おそ}れてみろ! それに秩父丸には勿体^ない程の保険^{ほけん}かけてあるんだ。ボロ船だ、沈^しんだら、かえ^かって得^えすつと」

給仕^{ボーイ}は「今」恐^{おそ}ろしい喧嘩^{けん}が! と思^{おも}った。それが、それだけで済^すむ筈^{はず}がなか。だが(!)

船長は咽喉^{のど}へ綿^{わた}でもつめられたごて、立ちすく^すんでいるではないか。給仕^{ボーイ}はこんな場合^{ばい}の

船長をかつて一度だって見たことがなかった。船長の云ったことが通らない？ 馬鹿な、そがん事が！ だが、それが起っている。給仕にはどうしても分らなんだった。

「人情味なんか柄でもなく持ちだして、国と国との大相撲がとれるか！」唇を思いっ切り唾をはいた。

無電室では受信機が時々小火花を出して、しきりなしになっとった。とにかく経過を見るために、皆は無電室に行った。

「ね、こがん打っつとに だんだん早うなるね」

係は自分の肩越し覗き込んでいる船長や監督に説明した。 皆は色々な器械のスイッチやボタンの上を、係の指先があちこち器用にすべつとを、それに縫いつけられたごて眼で追いながら、思わず肩顎根に力をこめてじいっとしとった。

船の動揺の度に腫物のごてに壁に取付けてある電燈が、明るくなったり暗くなったりした。横腹に思いっ切り打ち当る波の音や、絶えずならしている不吉な警笛が、風の工合で遠くなったり、すぐ頭の上に近くなったり、鉄の扉を隔てて聞えていた。

ジイー、ジイーと、長く尾を引いて、スパアクルが散った。と、そこで、ピタリと音がとまってしもた。それが、その瞬間、皆の胸へドキリときた。係周章てて、スイッチをひねったり、機械をせわしく動かしたりした。が、それっ切りだった。もう打って来ない。

係は身体をひねって、廻転椅子をぐるりとまわした。

「沈没です！……」

頭から受信器外しながら、そして低い声で云った。「乗務員四百二十五人。最後なり。救助される見込なし。S・O・S、S・O・S、これが二、三度続いて、それで切れてしもた」

それを聞くと、船長は頸とカラアの間に手をつっこんで、息苦しうに頭をゆすって、頸をのばすようにした。無意味な視線で、落着き四囲を見廻わしてから、ドアの方へ身体を向けてしもた。そして、ネクタイの結び目あたりを抑えた。 その船長は見とられなかった。

.....

学生上りは、「ウム、そうか！」と云った。その話にひきつけられていた。——然し暗い
気持がして、海に眼をそらした。海はまだ大^{ふと}うねりにうねり返っていた。水平線が見る間
に足の下になるかと、思うと、二、三分もしないうちに、谷から狭^せばめられた空を仰ぐご
て、下へ引きずりこまれていた。

「本当に沈没したかな独言^{ひとりごと}が出る。気になって仕方がなかった。同じように、ボロ船に
乗っている自分達のことが頭にくる。

蟹工船はどれもボロ船だった。労働者が北オホツツクの海で死ぬことなどは、丸ビルに
いる重役には、どうでもいい事だった。資本主義がきまりきった所だけの利潤では行き詰
まり、金利が下がって、金がダブついてくると、「文字通り」どんな事でもするし、どんな
所へでも、死物狂いで血路を求め出してくる。そこへもってきて、船一艘でマンマと何拾
万円が手に入る蟹工船、彼等の夢中になるのは無理がない。

蟹工船は「工船」（工場船）であって、「航船」ではない。だから航海法は適用されなか
った。二十年の間繋ぎ^{つな}放しになって、沈没させることしかどうにもならんヨロヨロな「梅
毒患者」のごたる船が、恥かしげ^{こいげしやう}ものう、上濃化粧をほどこされて、函館へ廻ってきた。
日露戦争で、「名誉にも」ビッコにされ、魚のハラワタのごて放って置かれた病院船や運送
船が、幽霊よりも影のうすい姿を現わした。少し蒸気を強くすると、パイプが破れて、
吹いた。露国の監視船に追われて、スピードをかけると、（そんな時は何度もあった）船の
どの部分もメリメリ鳴って、今にもその一つ、一つがバラバラ^ほ解ぐれそうだった。中風患
者のごてに身体をふるわせた。

然し、それでも全くかまわん。何故^{な ぜ}なら、日本帝国のためどんなものでも立ち上^{とき}るべき秋
」だったから。それに、蟹工船は純然たる「工場」だった。然し工場法の適用もうけと
らん。それで、これ位都合のよか、勝手に出来るところはなかった。

利口な重役はこの仕事を「日本帝国のため」と結びつけてしまった嘘^{うそ}んごたる金が、そ
してゴツソリ重役の懐^{ふところ}に入ってくる。彼は然しそれをモット確実なものにするために「代
議士」に出馬することを、自動車をドライブしながら考えとる。が、恐らく、それとカ
ッキリー分も違わん同じ時に、秩父丸の労働者が、哩^{マイル}も離れた北の暗い海で、硝子屑^{ガラスくず}のご
て鋭い波と風に向って、死の戦いを戦^{たたか}つとるのだ！

……学生上りは「糞壺^{くそつぼ}」の方へ、タラップを下りながら、考えとった。

「他人事ではなかぞ」

「糞壺」の梯子を下りると、すぐ突き当りに、誤字沢山で、

雑夫、宮口を発見せるものには、バット二つ、手拭一本を、賞与としてくれるべし。

浅川監督。

と、書た紙が、糊代りに使った飯粒のポコポコを見せて貼ってあった。

以後絡